KANSAI GAIDAI UNIVERSITY

ソ連における強制労働と建設：囚人と捕虜は、どのように労働利用されたか

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 関西外国語大学・関西外国語大学短期大学部 公開日: 2016-09-05 キーワード (Ja): 強制収容所, 捕虜労働, シベリア抑留, スターリニズム, 大粛清 キーワード (En): 作成者: 村井, 淳 メールアドレス: 所属: 関西外国語大学短期大学部
URL	https://doi.org/10.18956/00006161

関西外国語大学 研究論集 第91号（2010年３月）
Journal of Inquiry and Research, No.91 (March 2010)

ソ連における強制労働と建設

――囚人と捕虜は、どのように労働利用されたか――

村　井　　淳

要　旨

ロシア革命後、ソヴェト当局は反革命勢力などを弾圧するために、収容所を設けた。その後、ソ連邦が成立すると、白海に浮かぶソロヴェツキー島に本格的な強制労働収容所が建設された。1930年代のスターリン時代には、インフラ整備などで労働力が必要なことから、強制労働収容所とそれを管理運営するグラーグ（収容所管理総局）システムが必要に応じて構築されていった。その切っ掛けを提案したのは、自らも最初は囚人であったフレンケリであった。30年代の大粛清などにより無実の人が逮捕され、新しく建設された強制労働収容所で過酷な無賃労働を強いられた。また、第二次世界大戦期には、ドイツ軍や日本軍などの捕虜も同様の労働を強いられた。その結果、スターリン時代に、数百万もの人々が死亡した。1953年スターリンの死とともに、この強制労働システムは急速に崩壊し、囚人や捕虜は釈放されていった。しかし、これらの強制労働はソ連の産業に貢献したが、長い目で見るとソ連崩壊の一因になった。

キーワード：強制収容所、捕虜労働、シベリア抑留、スターリニズム、大粛清

はじめに

1917年のロシア革命以後、ソヴェト政権は、その政権・経済基盤を確立することに腐心してきた。政権確立については、ボリシェヴィキ以外のエスエルやメンシェヴィキも弾圧の対象となった。1922年末のソ連邦結成の２年後にレーニンが死去すると、スターリンとトロツキーの権力闘争が、表面化した。スターリンは公然と、トロツキーや権力に近い党幹部の排除に乗り出した。

さて、収容所・監獄については、「1917年９月１日、ロシアで712の拘禁場所があり、36,468人がいた」[1]とイヴァノーヴァは述べている。革命後「収容所の数は急増した。1919年末までには、ロシア共和国領内で21、1920年夏には49、11月には84、1921年１月までに107、11月には122の収容所があった。」[2]また、モスクワには1919年11月12日時点で７つの収容所があり、3,063人が収容されていた[3]。アップルボームは、「一九二一年にはもう四三県に八四の収容所があっ

たが、その大多数はこれら最初の『人民の敵』どもの『更生』を目的としたものだった」[4]と述べている。ロシア全体については、1920年末で18万人、1921年末で17～20万人ほどの囚人（チェカ、内務人民委員部、司法人民委員部などの監獄・収容所など）が存在したとされる[5]。

アップルボームは、初期の収容所は更生ないし矯正を目的としたものであると主張するが、強制労働も存在した。1918年１月24日に監獄労働隊についての司法人民委員部決定が出され、「監獄に監禁されている労働可能者から、国家に必要な労働生産のために労働部隊を組織する。それは、雑役夫の労働を上回るものではない」[6]とされた。また、1919年４月15日には、強制労働収容所についての全ロシア中央執行委員会決定が出され、県執行委員会各支部に、強制労働収容所が組織された[7]。その一方で、1924年10月16日に、全ロシア執行委員会は、ロシア・ソヴェト連邦社会主義共和国矯正労働法を制定した。

革命直後からおおよそソ連邦成立までの期間において、監獄・収容所などの役割は、反ソ分子や犯罪者を社会から隔離し、主に労働によって矯正させることであった。しかし、ソ連邦成立後の1920年代後半になると、囚人労働が注目されるようになった。当初は、囚人あっての労働であったが、その後、労働あっての囚人へと本末転倒する。つまり、労働力の必要性により、囚人や収容所が生み出されていったである。本稿では、ソ連において強制労働がどのように組織され、どのように利用されたかを考察する。それにより、ソ連スターリン全体主義体制の一端とその後のソ連への影響についても考えたい。

１．強制のための矯正労働収容所の始まり

ソ連邦成立直後の1923年５月、北極海に近い白海に浮かぶソロヴェツキー（ソロフキ）島に調査団が入った[8]。同年10月13日、ソ連人民委員会議は、アルハンゲリスクとコミの囚人留置所を基礎に、ソロヴェツキー特命強制労働収容所（СЛОН（スローン））の設置を決定した[9]。そして、島にあった修道院などを接収し収容所（лагерь（ラーゲリ））とした。ソロヴェツキー収容所は、設立直後に新たに設立された統合国家政治局（ОГПУ（オーゲーペーウー））に移管された。このソロヴェツキー収容所が、1930年代スターリン時代に巨大化するグラーグ・システムの直接の出発点であると考えられている。グラーグ・システムとは、強制収容所とその労働を管理するいくつかの管理総局の総体を指す。

この収容所は、のちに「強制」から「矯正」と変更され正式名称がソロヴェツキー矯正労働収容所となった。1923年10月13日に正式に開設されたこの収容所は、1931年11月16日に閉鎖され、白海バルト収容所に移管された[10]。囚人、所員、施設などは、白海バルト収容所に移された。囚人は、森林伐採・加工、泥炭採掘、漁業、農業、煉瓦製造、皮革・陶器・石灰の製造、機械工場やムルマンスク鉄道線での労働、道路建設、日用品製造、魚の加工などの労働に使用

された。囚人数は、最初2,557人、最大718,000人（1931年1月1日）、閉鎖直前の1932年15,130人、1933年19,287人であった[11]。囚人の死者数については、資料が不足しているが、1932年971人、1933年3,482人の記録がある[12]。上記の囚人数を基に単純計算すると、囚人死亡率は1932年は6.4%、1933年18.1%となる。

ソロヴェツキー収容所は、1929年頃までは、ソ連で唯一の公式収容所であった。次に設立された収容所は、ヴィシェーラ矯正労働収容所（1928－1929年設立）か、北方収容所（1929年6月28日設立）または極東矯正労働収容所（1929年設立）になる。

ソ連は、世界的に有名な作家ゴーリキーまで動員して、強制労働収容所を「矯正」のためのものだと宣伝した。そのためにも、1930年4月7日にはすべての公文書での「矯正労働収容所（ИТЛ）」の使用を決定した。同じ日に、ОГПУの下に収容所管理総局（ГУЛАГ）[13]の設置が決定された。これ以降1930年代に入ると、収容所の数は爆発的に増えていく。その理由として、スターリンの権力が確立していくこと、1928年から第１次５カ年計画が進行中ということ、そして何よりも囚人の労働利用に着目したことが挙げられる。それとともに、1929年から収容所や監獄を司法人民委員部から内務人民委員部（НКВД）に移管し始めた。

囚人の労働利用については、不思議な人物がかかわっている。フレンケリ（Френкель, Нафталий Аронович:1883－1960年）である。最近ロシアで刊行された、収容所関係の資料集には、フレンケリの経歴について、次のように出ている。1923年に越権罪、強要罪で逮捕され10年の労働刑を言い渡され、1927年に刑を免除され釈放された。1927年５月27日ソロヴェツキー特命収容所管理局経済部長となり、その後、白海建設労働長兼技師長補、モスクワ・ヴォルガ運河建設副長官、ОГПУバム建設長官、ＮＫＶＤ（内務人民委員部）バイカル・アムール矯正労働収容所長兼バム建設長官、極東НКВД鉄道建設管理局長官兼アムール鉄道収容所長、鉄道建設管理総局長官兼ソ連НКВДグラーグ副長官、НКВД－ＭＶＤ（内務省）鉄道建設管理総局長官などを歴任し、最終階級は技術中将（1943年10月29日から）であった。功績によりレーニン勲章などを授与され、1960年３月３日死去[14]。これが、彼の公式経歴である。

ナチスの強制労働収容所とは違い、ソ連の強制労働収容所は、民族的な差異はあまり関係しない。ナチス＝ドイツでは、ユダヤ人であること自体が罪であり収容所に入れられる理由となった。しかし、ソ連では、ロシア人であろうとなかろうと民族に関係なく、収容所に入れられた。理由は、反体制以外には、逮捕時に「そこにいたから」である。したがって、ソ連では、囚人と看守の垣根が低かった。いつ何時看守が囚人となるか分からなかった。逆に、囚人から解放されるだけでなく、看守さらには所長などになる例もあった。フレンケリは、その代表的な例と言ってよいだろう。

ソルジェニーツィンは、「≪群島≫には、≪フレンケリが収容所を考案した≫という根強い伝説が生きている。…（中略）…収容所というものはフレンケリ出現以前にもあったにはあっ

たが、まだ完璧を誇るような最終的で統一的な姿にはなっていなかったのだ。すべての真実の予言者は、彼が最も必要と思われる瞬間に出現するものだ。フレンケリもまた癌腫を移転させはじめたころの≪群島≫に現れたのである。」[15]と述べている。まさしく、フレンケリは絶妙のタイミングで出現した人物である。ソルジェニーツィンによれば、フレンケリはソロヴェツキーに囚人としているときから頭角をあらわし優遇されてきた。そして「一九二九年のある日、フレンケリを迎えるためにモスクワから飛行機がとんできて、彼をスターリンとの会見へ運んだ。」[16]というのだ。彼は、その「才能」のお陰で、スターリンの大粛清も生きのびただけでなく、スターリンにも認められ栄達を果たした。

さて、フレンケリは、どのように囚人労働利用組織であるグラーグ・システム建設に寄与したのであろうか。イヴァノーヴァは、こう述べている。「ずば抜けた組織力、才能、労働能力のあるこの人物［フレンケリ］が、収容所経済概念を創出したとされる。すでに1920年代に、1924－1927年はソロヴェツキー強制収容所の囚人でありながら、フレンケリは独立採算制の収容所転換計画を立案し、各段階に広げたと述べられている。フレンケリの提案は、根本的に強制収容所のすべての労働システムを変え、囚人労働利用により最大限の利益を国家が得ることが出来るようにした。」[17]そして囚人を労働可能レベルでカテゴリー分けし、ノルマを課し、達成度によって、食料増配などの待遇や早期釈放などの餌で労働意欲を絞り出した[18]。それだけでなく、彼の昇進とともにグラーグ・システムが整備されていく。

２．白海バルト海運河の建設

現在ロシアでは、大河と運河でモスクワを中心に、北は白海やバルト海から南はカスピ海や黒海、東はペルミまで結ばれている。結氷する冬以外は、木材や石油などを船で運搬する輸送の大動脈となっている。その手始めが白海バルト海運河の建設であった。それは、運河建設だけでなく、すべての囚人労働大規模利用の始めでもあった。そして、白海バルト海運河建設の成果は、ソ連の技術力・建設力を世界に宣伝する手段にもされた。

表１．白海バルト矯正労働収容所の囚人数と死者数（人）

年	月	囚人	死者								
					4月	74,715			10月	79,232	
1932	1月	64,400			7月	77,404	1,362	1939	1月	86,567	
	4月	80,200			10月	80,558			4月	84,772	
	7月	122,800	1,438	1936	1月	90,210			7月	77,025	2,462
	10月	125,000	(2.24)		4月	74,900			10月	76,408	
1933	1月	107,900			7月	44,045	1,298	1940	1月	76,863	
	4月	119,660			10月	36,796			4月	55,651	
	7月	66,971	2,010	1937	1月	58,965			7月	51,042	2,139
	10月	41,428	(2.03)		4月	61,918			10月	52,723	
1934	1月	70,375			7月	59,071	2,271	1941	1月	71,269	
	4月	68,003			10月	68,050	(3.50)		4月	73,194	
	7月	61,211	8,870	1938	1月	79,882			7月	67,673	1,888
	10月	58,632	(10.56)		4月	83,810				合　計	29,819
1935	1月	66,418			7月	77,278	3,945				

※（　）内は死亡率（%）、死者は各年の合計。死者の全合計が各年の死者の合計と一致しないが、出典に載っているとおり示した。各月は、１日時点での数字。なお、死亡率の記載していない年は、参考資料中のデータ欠落のため不明である。

出典：А.И. Кокурин, Ю.Н. Морков（составители）, *Сталинские стройки гулага 1930-1953, (Россия XX век, документы),* , Материк, Москва, 2005, стр.522.

スターリン名称白海バルト海運河は、白海南に位置するベロモルスクからオネガ湖へ出て、その南部からラドガ湖南部へ抜けて、ネヴァ川を通ってペテルブルクやバルト海に出るルートである。この運河建設のために、1931年11月16日、白海バルト矯正労働収容所が、ソロヴェツキー収容所を基にオネガ湖北端のメドヴェジェゴールスク市付近に設立された。この収容所の囚人労働は、白海バルト海運河の建設を中心に、白海バルト・コンビナート建設、木材調達、セゲジャ・パルプ・コンビナート建設、トゥーロマ水力発電所、モンチェゴールスク・ニッケル・コンビナートなど白海バルト海運河周辺の労働にも利用された[19]。

囚人数は、表１によると、36,796人（1936年10月１日）～119,660人（1933年４月１日）である。１年の間でも季節によって囚人数の変動は、激しい。死亡率は、おおよそ２～５％程度であるが、1934年は10.56％と目立っている。その原因は、「飢饉、収容所での囚人の食事の急激な悪化、春の増水徴候や作業施設の開設が迫ったための激しい労働強化であった。」[20]つまり1933年６月20日に白海バルト海運河が開通したので、この年は工期を予定通り進めるべく無理

をしたため、死者が増えたものと思われる。1933年6月に運河が完成してから釈放やモスクワ・ヴォルガ運河建設へ移動させられたりして、同年7月1日の囚人数が66,971人に減少した。

1933年に発行されたパンフレットによると、第1次5カ年計画の目玉でもあった白海バルト海水路（運河）は、閘門19、運河33を擁する大規模な水路を短期間に完成させたと賛美されている[21]。しかし、短期間で工事をしたためもあって水深が浅く、喫水の浅い比較的小型の船しか航行できない。とくに閘門は他の水路の閘門に比べて狭く、一度に入る船の数が少ない。この白海バルト海運河建設を実質的に指揮したのは、白海バルト矯正労働収容所の労働長であったフレンケリである。収容所長が替わろうとも、フレンケリは建設の当初から終了時まで労働長として建設を指揮した。白海バルト収容所は、運河完成後も白海コンビナート建設を始め、白海バルト海水路周辺のさまざまな建設や労働に囚人労働を提供していた。1941年9月18日に、この収容所は閉鎖され、その資材と囚人は国防建設関係の収容所建設に移転された[22]。

こうして、ソロヴェツキー収容所で芽生えた囚人労働利用が、白海バルト収容所で組織化され、大規模な事業である白海バルト海運河の建設に利用された。科学技術が発達していないソ連で人海戦術に頼らざるを得ない事情が、囚人労働を生んだと言ってもよいだろう。そのスイッチをいれたのが、フレンケリであったと思われる。しかし、もし彼がいなくても、それほど遅くなくスイッチは入ったであろう。

3．収容所の組織化とグラーグ・システムの構築

ソ連初期の建設は、まずは運河や鉄道といった交通路の建設である。とくに僻地に石炭や金などの鉱物資源が見つかると、それを運び出すための鉄道なども必要となる。そして、交通路に沿ってダムや発電所、コンビナート、工場が建設され、必要とあれば都市も建設された。それとともに各地に強制労働収容所が建設された。そうなると、もはや一つの収容所管理総局（グラーグ）だけでは、収容所や建設事業を管理できなくなった。地域や事業ごとに管理下に複数の収容所を擁する管理総局あるいは管理局が設立されるようになった。

最初の管理総局とそれと同等のものは全部で26あった。まず、最初に収容所管理総局（ГУЛАГ（グラーグ）：1930年4月25日開設）[23]が設立され、その後、極北建設管理総局（1931年11月13日開設）、鉄道建設収容所管理総局（ГУЖДС：1940年1月4日開設）、鉱山事業収容所管理総局（ГУЛГМП：1941年2月26日開設、ノリリスク鉱山開発）、ヴォルガ・ドン連絡運河建設収容所管理総局（1949年11月5日開設）、ヴォルガ・バルト海水路建設収容所管理総局（1952年7月3日開設）などが設立された。

それら管理総局のうちいくつかは、管轄下にさらに管理局を持つものもあった。例えば、鉄道建設収容所管理総局（ГУЖДС）の下には、バム建設・収容所西方管理局、バム建設・収

容所東方管理局、鉄道建設収容所北方管理局など6つの管理局があった。収容所管理総局には、極東HKBД収容所鉄道建設管理局、北東矯正労働収容所管理局の2つの管理局があった。

白海バルト海運河建設や最初の極東での鉄道建設など初期の収容所労働利用は、すべて収容所管理総局が管理していた。しかし、とくに極東での鉄道建設は、管理総局本部から離れていたので、その下に極東HKBД収容所鉄道建設管理局が設置された。その後、ソ連各地で鉄道建設などが計画されると、別に管理総局を創設し、その管轄下で地域ごとに鉄道建設管理局を必要に応じて設立あるいは廃止をしたのである。管理局の管轄下には複数の収容所があり、管理局の改廃などにともない、収容所の移管、再編、廃止、新設が必要に応じてなされた。

1923年にソロヴェツキー収容所が設立されて以来、1929年まで囚人の労働利用について試行錯誤が繰り返され、強制労働体制が形成されていった。さらに1930年に初めて管理総局（グラーグ）が設置されたが、管理総局は、1930年代には合計3つしか設置されなかった。しかし、1940年以降、管理総局管轄下の管理局も含め急増した。当局は、1930年代に管理総局－収容所システムの効率的な利用方法を確立したのである。それとともに囚人数も増加し、収容所囚人数は1941年ピークに達する（1,500,524人）。強制収容所とは別の緩やかな収容場所である居留地の囚人（429,205人）を加えた、囚人1,929,729人に対する1941年の死者は117,484人で死亡率6.0％である。その後、囚人数は、死亡や赤軍への入隊などでやや減少するが、逆に死亡率は、1942年が24.9％、1943年も22.4％と急増するも、1944年には9.3％と急減し、その後も緩やかに減少していく。[24]この死亡率急増の原因は、独ソ戦の影響によるところが大きいが、グラーグ・システム確立にともなう労働強化も考えられる。

こうして1940－41年頃に、内務人民委員を頂点として、管理総局－（管理局）－収容所というヒエラルキー状の内務人民委員部のグラーグ・システムが確立した。

４．グラーグ管理下における収容所－囚人の生活と労働利用

さて、いくつかの代表的な収容所のある時期について、代表的な事業別に、囚人の動態（在数や死者など）や待遇、労働利用の実態などについて特徴をまとめてみたいと思う。

ソ連初期の大規模建設の中心の一つは、運河建設であった。第1次5カ年計画では白海バルト海運河、第2次5カ年計画では、モスクワ・ヴォルガ運河（1947年にモスクワ運河と改称）が、目玉建設であった。さらにヴォルガ・ドン運河とヴォルガ・バルト海運河の建設と併せて4つの運河・水路建設が行われた。5つ目の大トルクメン運河は建設が中止された。モスクワ・ヴォルガ運河は、1932年に建設が始まり37年に完成した。閘門は11ある。この運河建設の中心であった収容所は、ドミトロフ収容所である。表2で示されるように約6年間で22,842人の囚人が死亡した。

表２．主な収容所の囚人数、死者数、逃亡者数（１）（人）

	ドミトロフ		バム収容所		
年	囚人	死者	囚人	死者	逃亡
1933	10,400	8,873	3,800	4,774（12.65）	
1934	88,534	6,041	62,130	5,788　（5.19）	10,102
1935	192,229	4,349	153,547	6,952　（4.27）	14,241
1936	192,034	2,472	180,067	3,372　（2.11）	12,537
1937	146,920	1,068	127,483	2,306　（1.35）	9,030
1938	16,068	39	200,907	7,272　（2.95）	6,585
	死者：22,842		死者：30,464		

※囚人数は、各年１月１日時点。（　）内は死亡率（%）。死者数は年間の数字であるから、表の囚人数より数字が大きい場合もある。死亡率は、年間の囚人数で割ったものである。

出典：А.И. Кокурин, Ю.Н. Морков (составители), *Сталинские стройки гулага 1930-1953, (Россия XX век, документы)*, Материк, Москва, 2005, стр.523,525.

独ソ戦が終わると、あらたな運河建設が始まった、1948年から52年にかけて、ヴォルガ・ドン運河が建設された。1949年にはヴォルガ・ドン連絡運河建設管理総局が設置され、その管理下に６つほどの収容所があり、おおよそ５万～12万人の囚人がいた。「1948－1952年の間に、236,778人の囚人が送り込まれた。そのうち、釈放114,492人、死亡1,766人、逃亡1,123人である。最高囚人数は、1952年１月１日の118,178人である。」[25]

さらにこの後、1940年に建設が始まったが独ソ戦により中止されていたヴォルガ・バルト海運河・水路（オネガ湖・チェレポーヴェツ）が、1952年から、ヴォルガ・バルト海水路建設収容所管理総局も設置されて、その建設が再開された。管理総局の配下にヴィチェゴールイ収容所、シェクスナ収容所（のちこの2つは、ヴォルガ・バルト海収容所に統合）、ヴァルナヴィン収容所があった。

交通輸送のもう一つの大きな手段は、鉄道である。飛行機も交通輸送手段としては、とくに僻地では有効であり、飛行場建設管理総局を設置して飛行場を各地に建設した。しかし、飛行機輸送は、大量輸送には不向きである。大量輸送手段として運河とともに整備されたのが、鉄道であった。一方、道路の整備は、鉄道建設やその補助という場合が多く、幹線道路の整備は、とくにシベリアでは進まなかった。もちろん幹線道路管理総局（1938年設立）を設置し、道路建設も行ったが、鉄道建設の比ではない。

鉄道建設収容所管理総局が設置されたのは、1940年１月４日であるが、それよりずっと以前に、収容所管理総局の下でバイカル・アムール（バム）収容所（1932年11月10日－38年５月20

日）などが鉄道建設に乗り出した。とくにシベリア中東部では、鉄道の整備が遅れていた。バム収容所もシベリア鉄道の整備やそれに連なる支線などの建設を行った。1934年７月15日、白海バルト海運河やヴォルガ・モスクワ運河の建設において手腕を発揮したフレンケリが、バム収容所長（第２代）に任命され、極東鉄道管理局長官にもなった。こうして独ソ戦開始直前には、鉄道建設の総体制が整備された。

さらに戦後は、管理総局の下に管理局が地域ごとに設けられ、鉄道整備が進められた。その建設には、ドイツ人や日本人の捕虜も多数使用された。初期のバム収容所は、タイシェットやコムソモリスク、ウスチ・ニマンを中心に鉄道建設などを行った。表２によれば、バム収容所における1933年の囚人の死者は4,774人で死亡率は12.7％にも達した。最初は、収容所そのものの建設が必要であり、居住環境などが整備されていなかったものと考えられる。その後死亡率は低下するが、1938年に収容所が閉鎖されるまでに、30,464人の死者を出した。年平均5千人の死者である。冬は零下40度以下になる極寒の地で、さらに食料や生活環境が劣悪な状態での強制労働が、多数の囚人の命を奪った。そのような状態であったので、厳しい気候や広大な無人地帯などの自然環境が収容所を取り囲んでいるとはいえ、「バム収容所では、大量の囚人逃亡を出し、半数以上は捕まらなかった。囚人の多くは反革命罪である。」[26]

表３は、鉄道建設を担当した収容所の代表的なものである。ニジネ・アムール矯正労働収容所は、1939年５月13日開設、47年９月10日閉鎖した。北方鉄道矯正労働収容所は、1938年５月10日開設、50年７月24日閉鎖した。北ペチョーラ鉄道矯正労働収容所は、1940年５月14日開設、50年７月24日閉鎖した。ニジネ・アムール収容所では、９年間に16,698人の死者を出した。年平均1,855人である。北方鉄道収容所では、13年間で20,455人、年平均1,573もの死者を出した。逃亡者も死者とほぼ比例するように増減し、1940年に最高の1,694人を記録している。北ペチョーラ鉄道収容所でも、14年間で34,377人、年平均約2,456人もの死者を出した。どの収容所においても、1941－44年頃には死者が増加した。それは、独ソ戦による食糧事情の悪化などが影響しているものと思える。1945年３月10日のグラーグ調査局の報告では、「戦争初期には、健康な囚人の大部分を釈放し軍に入れたことにより、また、極めて悪条件に大量の囚人を放り込んだことにより、とくにＨＫＶД収容所での生産への労働可能率が急低下し、病人数が増加した」[27]と述べられている。つまり、1941－43年頃に一部の収容所で囚人の釈放数が増加しているのは、単純に刑期を全うしたため放免したのではなく、人員不足を補うため、優良囚人を赤軍に半ば強制的に徴兵したからである。

表３．主な収容所の囚人数、死者数、逃亡者数（２）（人）

	下流アムール			北方鉄道収容所			北ペチョーラ鉄道		
年	囚人	死者	逃亡	囚人	死者	逃亡	囚人	死者	逃亡
1938				*20,803	2,344	114			
1939	*5,743	194	172	29,809	2,386	393			
1940	23,211	2,550	389	26,548	2,225	1,694	*3,851	3,664	266
1941	50,535	2,980	243	84,893	2,775	378	34,959	6,504	1,015
1942	50,992	4,519	104	53,344	1,290	302	102,354	8,756	346
1943	64,056	4,877	195	29,741	4,809	49	58,825	9,386	122
1944	33,746	830	105	14,757	1,294	34	23,019	821	46
1945	25,221	428	35	11,981	612	39	28,232	1,170	31
1946	12,409	227	26	13,388	387	102	34,667	720	60
1947	7,719	93	12	26,599	907	59	56,615	845	47
1948				23,780	861	49	45,944	686	16
1949				29,210	399	28	39,823	399	14
1950				27,686	166	11	42,028	403	44
1951							59,408	433	11
1952							38,926	323	41
1953							47,001	267	12
1954							23,678		
	死者合計：16,698			死者合計：26,450			死者合計：34,377		

＊７月１日の数字。※囚人数は各年１月１日時点。

出典：А.И. Кокурин, Ю.Н. Морков（составители）, *Сталинские стройки гулага 1930-1953, (Россия XX век, документы)*, Материк, Москва, 2005, стр. 528－531.

極東の鉄道建設は、最初、ソ連НКВДバム建設が担当した。おおよそ269,000人の囚人が投入された。その後1938年にバム収容所以外に、1938年５月22日アムール収容所、ブレインスク収容所、東方収容所、西方収容所、南東収容所、南方収容所の６つの収容所が新設され、計７つの収容所を統括するためフレンケリを長官とする極東НКВД鉄道建設収容所管理総局が設立された（アムール収容所長兼任）。その後、バム収容所は廃止され、1939年には、管理総局管轄下の収容所は、ブレインスク収容所、東方収容所、南方収容所、南東収容所、沿海収容所、ニジネ・アムール収容所となった[28]。

このように1940年頃までには、運河や鉄道などの交通輸送インフラが整備された。それは、物資や人員の輸送のためである。とくに戦時においては兵員や物資・兵器の輸送にも役だったが、とくに貢献したのは、僻地で採掘された石炭・石油や金、ニッケルなどの鉱物資源の輸送である。ソ連成立直後の重要な資源は木材ぐらいであったが、その後調査隊をシベリアや極北各地に派遣し、あらたな地下資源を発見した。そのような僻地での地下資源採掘あるいは採掘

資源を精錬加工するためのコンビナート建設に囚人労働を利用したのである。極東コリマでの金採掘に関連して、マガダン州のマガダン市は、中心都市であった。

地下資源採掘では、シベリア収容所（クズバス炭田）やボルクタ収容所での石炭採掘やノリリスク収容所のニッケル採掘、北東収容所での金採掘（コリマ）などが有名である。

さて、とくに極東コリマでの金採掘を見てみよう。1931年共産党中央委員会で金採掘問題が討議され、極北建設管理総局（1931－53年）が設置された。翌年４月１日に、極北建設管理総局管理下に北東収容所が設置された。この収容所は、表４のように人員、設置期間とも最大規模のものである。1940年には、18万人もの囚人を擁した。その後増減するが、常に７万人以上の囚人を擁し、22年間で119,647人、年平均5,439人もの死者を出した。1941年には、15,676人もの最高死者数を出した。それらの囚人労働により、1932年から1941年までに、純金で合計358.1tを採掘した。1932－1955年でのソ連での金採掘量は、2521.4ｔで、そのうち極東建設での採掘量は1148.4ｔである。実に45.5％になる。

極北建設での中心は北東収容所の囚人であったが、1946年には、ウラソフ隊員[29]や日本軍捕虜も労働に利用された。1948年９月１日には、極北建設領域には、250,800人が存在し、そのうち非労働者26,754人（子供17,922人含む）、全労働者は224,046人であり、労働者のうち、雇用人－115,749人、囚人－104,828人、捕虜－3,469人であると記録されている。大量の雇用労働者も投入されるようになった。[30]

収容所の囚人は、内務人民委員部の管理総局あるいは管理局の下で、運河や鉄道、道路、飛行場、港湾、工場などの建設、あるいは石炭や金などの鉱物資源の採掘、その他、木材伐採、農業、漁業、畜産などありとあらゆる労働に利用された。しかし、これら内務人民委員部の管理下だけで囚人が、利用されただけではない。囚人は、他の各人民委員部の要請に基づき、様々な労働に貸し出された。各人民委員部に、少ないものは数百人から多いものには２～３万人もの囚人が貸し出されていた[31]。

表４．主な収容所の囚人数、死者数、逃亡者数（３）（人）

	北東収容所				北東収容所			特別収容所No.5		
年	囚人	死者	逃亡	年	囚人	死者	逃亡	囚人	死者	逃亡
1933	11,100			1946	69,459	3,931	402			
1934	29,659			1947	79,613	10,312	453			
1935	36,313			1948	106,893	4,648	576	**3,896	146	3
1936	48,740			1949	93,115	1,946	562	15,570	383	15
1937	70,414	*4,000		1950	129,411	2,114	591	23,906	303	2
1938	90,741	12,400		1951	154,242	2,546	759	28,716	325	2
1939	117,926	9,577	19	1952	167,737	1,690	309	31,989	268	0
1940	161,946	9,274	22	1953	151,069	679	171	24,009	184	0
1941	179,041	15,676	838	1954	88,077			32,388		
1942	147,976	14,933	1,114	合計		119,647	7,778		1,609	22
1943	96,341	11,156	1,225	全合計：入所：859,911、釈放：445,171、死亡：21,256、逃亡：7,800						
1944	76,388	6,657	437							
1945	87,335	7,608	300							

※囚人数は、各年１月１日時点。＊1932－1937年の合計。＊＊10月１日時点

出典：А.И. Кокурин, Ю.Н. Морков（составители）, *Сталинские стройки гулага 1930-1953, (Россия XX век, документы)*, Материк, Москва, 2005, стр. 411－412.

このように、ソ連スターリン体制下の収容所は、当初には反スターリン派、反ソ派などの投獄という側面はあったとしても、1930年代にグラーグ・システムが整備されると、巨大な産業複合体へと成長した。そして、その産業の必要に応じてさらに収容所と囚人が生み出されていくようになる。

５．捕虜の労働利用

ソ連では、あらゆる人間が囚人として労働利用された。独ソ戦で荒廃した国土や生産を立て直すにも、戦後多数の労働力が必要とされた。そこで、目をつけられたのが、ドイツ軍や日本軍など交戦国の捕虜である。捕虜については、戦中からドイツ軍やハンガリー軍などの捕虜の強制労働を開始し、終戦直後にはこれに日本軍捕虜が加えられた。一般囚人とは別に捕虜収容所が作られたが、労働利用については、基本的に囚人と同じである。各人民委員部にも労働力として貸し出された。

第二次世界大戦期における最初の捕虜は、ポーランド軍捕虜である。1939年９月、ドイツ軍

がポーランドに侵攻し、大戦が始まった。数日後、ソ連軍は、独ソ不可侵条約の秘密議定書に基づいて、東からポーランドに侵攻した。この時点でソ連は第二次世界大戦の交戦国とはなっていないが、同大戦期における最初のソ連における捕虜が発生した。その後、1941年6月22日、独ソ戦が始まるとドイツ軍及びその同盟軍（イタリア軍、ハンガリー軍、ルーマニア軍など）の捕虜が発生した。

ヤルタ会談で決められたソ連の対日参戦は、太平洋戦争そして戦後の極東地域にソ連が影響力を及ぼそうとする意図があったが、多数の捕虜を労働利用しようとする意図もあった。1945年8月23日には、ソ連国防委員会は、「ソ連HKBД捕虜管理総局は、以下の労働に50万の日本人捕虜を使用する」[32]ことを決定した。バイカル・アムール線やザバイカル線などの鉄道建設、木材伐採、コンビナート建設、サハリン油田、道路建設、兵舎建設、炭坑労働、鉱山労働、工場建設などの労働に、沿海地方、ハバロフスク地方、チタ州、イルクーツク州、ブリヤート・モンゴル自治共和国、クラスノヤルスク地方、アルタイ地方、カザフ共和国、ウズベク共和国などで労働利用された。

表5は、1949年1月1日時点における捕虜管理総局の報告である。それによれば、捕虜総数は、3,899,397人でそのうち日本軍関係の捕虜（日本人、朝鮮人、中国人、満洲人）は、617,778人である。1946年8月1日時点で、ドイツ軍捕虜は、ソ連内務省収容所に1,336,059人、病院に85,757人、労働大隊に109,047人（計153,863人）、日本軍捕虜は、ソ連内務省収容所に392,583人、病院に12,556人、労働大隊に45,275人（計450,414人）である。階級別内訳は、ドイツ軍捕虜、将官351人、将校83,312人、下士官・兵1,447,300人、日本軍捕虜、将官168人、将校、22,675人、下士官・兵427,571人である[33]。表6によれば、1945年9月以降に日本軍捕虜が急増し、収容所建設が急ピッチで進められ、1946年1月1日時点には267と最大数となった。1945年の収容所廃止が111と多いのは、労働内容により捕虜を移転させたため、廃止になった収容所も多かったためであろう。

表５．ソ連における主な民族別捕虜数（人）

民　　族	捕虜総数	帰　還	死　亡	現在数
ドイツ	2,079,717	1,315,510	317,512	430,670
オーストリア	156,966	137,838	10,746	7,760
イタリア	48,957	21,096	27,683	20
ハンガリー	526,604	418,782	51,005	8,021
ポーランド	62,999	54,434	3,115	115
ルーマニア	181,967	106,243	50,959	2,551
チェコスロバキア	68,889	55,701	4,033	281
ユーゴスラヴィア	21,629	17,207	1,456	187
ウクライナ	5,561	87	679	94
西ウクライナ	5,354	5,017	2	—
フランス	22,115	20,762	1,329	21
ロシア	1,859	141	181	51
ソ連市民	571	—	12	314
フィンランド	2,475	1,969	403	2
リトアニア	955	26	89	22
ラトビア	3,354	28	507	9
エストニア	6,398	49	1,292	2
ベルギー	2,021	1,734	175	96
日本	590,830	440,387	52,165	91,226
朝鮮	10,312	9,913	70	222
中国人	16,150	15,713	135	94
満洲人	486	486	—	—
その他				
総　合　計	3,899,397	2,644,963	569,115	542,576

※帰還者数、死亡者数、現在数は、1949年１月１日時点のもの。

出典：M.M. Загорулько (составитель), *Военнопленные в СССР 1939-1956, Документы и материалы,* Логос, Москва, 2000, стр. 331.

捕虜は、強制収容所の囚人と同様、さまざまな労働に使用され、また各人民委員部（1946年から省に名称変更）にも貸し出された。もちろん内務省での労働利用が最大で、1946年６月１日現在で、ドイツ軍捕虜154,216人、日本軍捕虜126,890人、計281,106人が内務省で使役されていた。その他、主なものを挙げると、国防省（ドイツ軍捕虜159,120人、日本軍捕虜48,989人）、重工業企業建設省（ドイツ軍捕虜106,248人、日本軍捕虜16,933人）、燃料企業建設省（ドイツ軍捕虜82,567人、日本軍捕虜21,482人）、交通省（ドイツ軍捕虜74,627人、日本軍捕虜22,915人）、東部地区石炭工業省（ドイツ軍捕虜19,844人、日本軍捕虜51,750人）、西部地区石炭工業省（ドイツ軍捕虜74,767人）、林業省（ドイツ軍捕虜23,224人、日本軍捕虜56,567人）、陸海軍企業

建設省（ドイツ軍捕虜46,638人、日本軍捕虜21,977人）、発電所省（ドイツ軍捕虜54,444人、日本軍捕虜7,170人）、非鉄金属省（ドイツ軍捕虜29,151人、日本軍捕虜27,950人）、セルロース・製紙工業省（ドイツ軍捕虜37,279人）、航空工業省（ドイツ軍捕虜30,079人、日本軍捕虜4,944人）などである[34]。

表６．ソ連内務人民委員部・内務省の捕虜収容所数（1941－1950年）

年月日	在数	新設	廃止	年月日	在数	新設	廃止
1941.6.22	8	10	4	1946.1.1	267	15	52
1942.1.1	6	31	6	1947.1.1	213	11	69
1943.1.1	31	25	4	1948.1.1	172	－	87
1944.1.1	52	116	12	1949.1.1	85	－	75
1945.1.1	156	222	111	1950.1.1	10	－	－

出典：M.M. Загорулько（составитель），*Военнопленные в СССР 1939-1956, Документы и материалы,* Логос，Москва，2000，стр.205.

とくに日本軍捕虜が労働に投入されたのは、バイカル・アムール（バム）鉄道建設であり、1946年２月26日時点で、日本軍捕虜総数594,000人、そのうちНКВДの管理下に499,807人、捕虜総数の18.9％にあたる112,444人がバム鉄道建設に投入された[35]。

日本軍捕虜の場合、ソ連当局は旧日本軍の階級組織を温存し、将校には労働をさせず、下士官・兵に対する労働現場監督として利用した。それは、多くの日本兵が日本軍将校に狂信的服従心があったからである[36]。

生きて「ダモイ（домой）」（帰還）を果たした捕虜とダモイできずにソ連の土となった捕虜は、どれくらいいるのであろう。表５によると、1949年１月１日時点で、ドイツ人捕虜は、ドイツ人捕虜総数の63.3％の1,315,510人が帰還、15.3％の317,517人が死亡、日本人捕虜は、日本人捕虜総数の74.5％の440,387人が帰還、8.8％の52,165人が死亡している。捕虜全体では、総数の67.8％の2,644,963人が帰還、14.6％が死亡している。表５にロシア人、フランス人などの捕虜が存在するのは、おそらくウラソフ将軍麾下のドイツ軍外人師団や武装親衛隊フランス人師団などの捕虜であろう。

日本厚生省援護局作成資料では、シベリア抑留者総数約575,000人（満蒙開拓団民や満洲国官吏なども含む）、このうち帰国者約474,000人、死者約55,000人で、バム鉄道建設に5万人以上が投入されたとしている。抑留者は1950年4月末までにほとんどが帰国し、戦犯となった者も1950年末までには帰国したという[37]。

1956年10月18日のソ連内務省の報告書では、もっと具体的な数字が示されている。1945年満

洲での捕虜639,776人（日本軍）でそのうち609,328人が日本人、30,328人は中国人、朝鮮人、モンゴル人である。将官163人、将校26,573人、下士官・兵582,712人である。1945－1956年に帰還したのは546,752人（将官112人、将校25,728人）であり、その他日本に6,241人の拘留者・逮捕者が送還された。この期間に死亡した日本人は、61,855人（将官31人、将校607人）である。1956年１月１日時点で、ソ連残留日本人は713人であり、サハリン州に577人、クラスノヤルスク地方に103人、女性は419人である[38]。ノモンハン事件の時には、「生きて虜囚の辱め」をうけたとしてソ連に残留した日本人もいたが、このときの残留日本人の理由は、現地のロシア人との結婚やサハリン（樺太）の旧日本領で朝鮮人との結婚が主な理由であろう。戦後、旧日本領南樺太に残された朝鮮人は、日本や韓国に引き揚げられず見捨てられた。そのような配偶者を持つ日本人も帰還を諦めた人が多かった。ともかくも、日本人捕虜は、約10％がソ連の土となったのである。表６の日本人捕虜総数と数字が一致しないのは、おそらく捕虜の管轄当局（内務省あるいは国防省など）の違いなどによるものと思われる。

ドイツ軍やそのヨーロッパでの同盟国軍の捕虜総数は、表５で示したとおりであるが、帰還者や死者の最終的な数字は不明である。おおよその数字などは、ドイツやソ連（ロシア）の資料にあるだろう。独ソ戦最大の激戦となったスターリングラード攻防戦では、パウルス将軍麾下のドイツ軍第６軍が降伏し、９万１千人が捕虜となり、戦後帰国できたのは５千人であったという[39]。約5.5％の帰還者である。ソ連に残留したドイツ兵もいたかも知れないが、90％以上が死亡したのであろう。一般的にドイツ軍捕虜は、捕虜期間が長いものが多く、侵略者への憎しみもあったので、過酷な取扱を受け、日本軍捕虜よりも２倍ほど死亡率が高かった。

また、捕虜についても囚人同様、ノルマの達成状況や労働内容に応じて、食事を増減するなどの方法で労働が強制された[40]。こうして、戦時捕虜もそれ以前からの囚人労働力と同様に活用され、基本的にはグラーグ・システムに組み込まれたのである。

結び ── スターリンの死とその後

1953年３月５日、スターリンが死んだ。捕虜については、外国との関係もありそう長くは抑留できないので、1940年代末には帰国がかなり進んでいた。問題は、多数の囚人をかかえるグラーグ・システムである。グラーグ・システムも徐々にではあるが戦後変化し、スターリンの死によってその崩壊が加速した。スターリンの死の直後の３月27日には大赦令が発せられた。

グラーグは内務省から司法省に移管され、刑期５年以下の囚人や18歳未満の未成年、妊娠中や子連れの女性が釈放された。それとともに、大トルクメン運河、ヴォルガ・ウラル運河、ドン川下流ダム、ドネーツク港、サハリン海底（タタール海峡）トンネル、サレハルド・イガール鉄道の建設など、グラーグのプロジェクトが20以上中止された。

これら一連のことは、グラーグ・システムの解体と囚人の労働利用の廃止への方向転換だと見ていいであろう。収容所・居留地の囚人数は、1953年1月1日には2,472,247人であったのが翌年1月1日には1,325,003人となり、1960年1月1日には582,717人まで減少した。囚人死亡率は、1942年に24.9%（死者352,560人）、1943年に22.4%（同267,826人）で最高を記録した。その後1944年に9.3%（同114,481人）、1956年には0.4%（同3,164人）まで減少した[41]。

グラーグ・システムの解体は、スターリンの死が切っ掛けとなっているが、そればかりが理由でもない。独ソ戦の復興のためには、大量の労働力が必要であった。その担い手となったのが、囚人と捕虜であった。囚人の中には、ドイツ軍の捕虜となったソ連兵も多数いた。独ソ戦期の「人民の敵」は、トロツキストから外国のスパイへと理由付けが変わった。総力戦で国家が疲弊しているにもかかわらず、大トルクメン運河の建設などあらたなプロジェクトも計画された。しかし、1946年から55年にかけて、コリマ収容所、カラガンダ収容所、ヴォロクター収容所、ノリリスク収容所など各地の収容所で暴動やストライキが起こった[42]。そのような状況の中で、スターリンの死がグラーグ・システム解体の引き金を引いたのであろう。スターリン体制下のグラーグ・システムは、権力と生産を集中し、独ソ戦を勝ち抜くことに貢献したが、独ソ戦にもまして人的経済的損失も大きかった。スターリンの死後、このシステムは崩壊したが、依然として全体主義体制は残った。結局、ソ連は非効率的な社会主義経済体制から抜け出せず、後のソ連崩壊につながった。

註記

1）Г. М. Иванова , *История Гулага 1918-1958: Социально- экономический и политико-правовой аспекты*, Наука, Москва, 2006, стр. 127.

2）Там же, стр. 131.

3）Там же, стр. 131.

4）アン・アップルボーム（川上洸訳）『グラーグ－ソ連集中収容所の歴史－』白水社、2006年、15頁。

5）Michael, Jakobson, *Origins of the Gulag: the Soviet Prison Camp System 1917-1934*, The University Press of Kentucky, 1933, P.24.

6）А.И. Кокурин, Н.В. Петров (составители), *Гулаг 1918-1960 (Россия XX век, документы)*, Материк, Москва, 2002, стр .14.

7）Там же, стр. 15.

8）『聖地ソロフキの悲劇－ラーゲリの知られざる歴史をたどる－』（内田義雄、NHK出版、2001年、46頁）では、「一九二三年五月に開設された」 となっているが、正式には同年10月23日の開設である。

9）*Гулаг 1918-1960*, стр. 29.

10) その後、ソロヴェツキー収容所は、1932年１月１日－33年12月４日再設置の後、白海バルト収容所の支所となった。さらにソロヴェツキー特命監獄として再設置され、最終的に、1939年11月２日に閉鎖された。(М.Б. Смирнов, (составитель), *Система исправительно- трудовых лагерей в СССР 1923-1960*: *Справочник*, Звенья, Москва, 1998, стр. 394-395.)

11) Там же, стр. 394-395.

12) В.Б. Жиромская, (ответственный редактор), *Население России в XX веке, Исторические очерки*, том I. *1900-1939гг.* РОССПЭН, Москва, 2000, стр. 319.

13) 一般にグラーグと言えば、ソ連スターリン体制下の収容所や管理総局などすべてをふくむ矯正労働システム全体を指す言葉として用いられるが、狭義には、最初の収容所管理総局あるいは、それと同列の鉄道建設などの目的を冠した管理総局を指す言葉である。本論文では、前者の意味ではグラーグ・システムを使用した。

14) А.И. Кокурин, Ю.Н. Моруков (составители), *Сталинские стройки гулага 1930-1953, (Россия XX век, документы)*, Материк, Москва, 2005, стр. 516. *Гулаг 1918-1960*, стр.853.

15) A.ソルジェニーツィン、(木村浩訳)『収容所群島３』ブッキング、2006年、96－97頁。

16) 前掲書、99頁。

17) Иванова, там же, стр. 236.

18) アップルボーム、前掲書、92－93頁。内田義雄、前掲書、86－90頁。

19) *Система исправительно-трудовых лагерей в СССР 1923-1960*, стр.162-163.

20) *Сталинские стройки гулага 1930-1953*, стр.522.

21) Ю.А. Дмитриев, *Беломорско-Балтийский водный путь (от замыслов до воплощения)*, Петрозаводск, 2003, стр.150.

22) *Система исправительно-трудовых лагерей в СССР 1923-1960*, стр.162.

23) 1930年４月７日、ソ連人民委員会議の決定に基づき、同年４月25日、ОГПУが収容所管理局を設立した。のち管理総局となる。

24) 拙稿、「ソ連・抑圧システムの囚人についての考察－強制収容所・居留地・監獄などにおける囚人の数、死亡率、構成、動態－」(『法学新報』第112巻７・８号、2006年、655頁)。囚人数は１月１日時点の人数である。

25) *Сталинские стройки гулага 1930-1953*, стр.121.

26) Там же, стр. 219.

27) О.В. Хревнюк, (составитель), *История сталинского гулага Конец 1920-х —первая половина 1950-х годов*, том3 (Экономика гулага), РОССПЭН, Москва, 2004, стр. 217-218.

28) Там же, стр. 218,219.

29) レニングラード戦でドイツ軍の捕虜になったウラソフ中将を司令官に、ドイツ軍の下に組織されたロシア人師団である。その隊員は、戦後「祖国の裏切り者」として死刑となったり、収容所で過酷な労働に従事させられた。(Крилл Александров, *Русские солдаты вермахта*, Яуза, Москва,

2005)

30) *История сталинского гулага Конец 1920-х —первая половина 1950-х годов*, том 3, стр. 369-411,431.

31) Там же, стр. 219-220.

32) В.Н. Вартанов, И.М.Попов, В.А. Гаврилов, Е.И. Зюзин, В.Г.Исакова, А.Н.Почтаев, В.А. Сутулов, *Русский архив;Великая отечественная, Советско-Японская война 1945 года, история военно-политического противоборства, двух держав в 30-40-е годы: Документы и материалы,* Т.18 (7-2), ТЕРРА, Москва, 2000, стр.175.

33) М. М. Загорулько, С.Г. Сидоров, Т.В. Царевская (составители), *Военнопленные в СССР 1939-1956, Документы и материалы,* Логос, Москва, 2000, стр.669.

34) Там же, стр. 661.

35) *Военнопленные в СССР 1939-1956,* стр.240-336.

36) 阿部軍治『シベリア強制抑留の実態－日ソ両国資料からの検証－』彩流社、2005年、211－212頁。ヴィクトル・カルポフ（長勢了治訳）『［シベリア抑留］ソ連機密資料が語る全容－スターリンの捕虜たち』北海道新聞社、2001年、165-166頁。若槻泰雄『シベリア捕虜収容所』明石書店、1999年、50頁。

37) 高橋大造、堀江則雄「シベリア抑留」（川端香男里他監修『新版ロシアを知る事典』平凡社、2004年、335－336頁）。

38) *Военнопленные в СССР 1939-1956,* стр.337-338.

39) 青地弥一郎「スターリングラード攻防戦」（『新版ロシアを知る事典』385頁）。パウル・カレル、ギュンター・ベデガー（畔上司訳）『捕虜－誰も書かなかった第二次大戦ドイツ人虜囚の末路－』（学研、2000年、552頁）によれば、スターリングラードでの1943年２月３日までのドイツ軍捕虜は、107,800人で、そのうち帰還者は6,000人であるという。

40) 阿部軍治、前掲書、303－306頁。若槻泰雄、前掲書、93－101頁。

41) 拙稿、前掲書、655頁。

42) 稲子恒夫編『ロシアの20世紀－年表・資料・分析－』東洋書店、2007年、555－556頁。

（むらい・じゅん　短期大学部准教授）